

灰島かり (著)
『絵本を深く読む』

2017年 玉川大学出版部 A5判 224頁 定価(本体2,400円+税)

小坂田 摩由*

現代日本において、子ども時代、絵本に触れずに育ったという人はほとんどいないと言って差し支えないだろう。みな程度の差こそあれ、様々な絵本に触れた記憶を持ちながら大きくなってゆく。そして大人になった今でも、好きな絵本といえばこれ、というものが即座に挙げられる人もいれば、未だに絵本を開くことがあるという人もいる。筆者もそのような人間の一人であり、故に本書の題名として掲げられている、絵本を「深く」読むということがどういうことなのか、非常に興味が湧いた。

本書では、現在まで日本で読み継がれてきた『はじめてのおつかい』『かいじゅうたちのいるところ』『ピーターラビットのおはなし』などの有名な絵本が多く取り上げられており、子どもを夢中にさせてやまない優れた作品の共通点が明らかにされている。しかし、論の対象はそればかりではない。『大森林の少年』『ナイトシミー』といった比較的最近の作品にも改めて目が向けられているのが、本書の特徴と言えるだろう。これらは、本書の著者灰島氏自らの翻訳によって日本に紹介された絵本でもある。

本書の冒頭「はじめに」で灰島氏は、絵本の世界に発生する要素として、「絵」と「文」だけでなく、大人が子どもに読んで聞かせる際の「声」、また大人と子どもが共に存在するという「場」を挙げている。本書の大きな目的は、このように他のメディアとは異なった独自の要素を持つ絵本のありようについて探ることとなっている。中でも灰島氏が特に着目している要素は、最初に挙げられた「絵」である。本書では画家自身の画風やその絵を描くにあたって選択された筆致、色遣いへの言及はもちろんのこと、描かれているモチーフや人物の動きやポーズ、また物や人が描かれた向きや視点などが、見落とすことなく細かくとらえられている。絵本という世界の中でストーリーと同等、いやそれ以上に中心的な役割を占めている「絵」の一枚一枚を、すみずみまで緻密に観察する灰島氏の眼は賞賛に値するだろう。その上でそれがどのような意図をもって描かれたものか、そして読者にどのような印象を与える結果となっているかまでが、時にはユング心理学・色彩心理学なども援用されながら、詳細に分析されている。

第1章では、男の子の冒険が論じられている。典型例として挙げられた作品は、『かいじゅうたちのいるところ』『もりのなか』などである。いずれも、それまで母親の庇護下にあった少年がひとりで旅に出て、しばしば父親的な側面を持つ「他者」と出会い、それによって成長し帰還するというストーリーを持つ。一方、第2章で女の子の冒険の典型例として挙げられているのは『はじめてのおつかい』『まどのそとのそのまたむこう』などであり、さらにそれらのストーリーの起源を遡ると、はじめにあるのは「赤ずきん」である。女の子の冒険や旅とはつまるところ「おつかい」に尽きるものであり、そして様々な危険の犠牲者となりながら「おつかい」を終えた女の子たちは、みな「小さな母」という姿へと成長するのである。この二つの章を通して灰島氏は、絵本における男女の冒険の相違点を論じている。

第3章は、ポストモダン絵本についての分析である。ポストモダン絵本とは、進歩や理想という「大きな物語」の終焉を迎え、「成長」という子どもの本最大のテーマにゆらぎを差しこんだものである。特にここでは主人公にしか見えない心の友だちが論の中心となっており、その描かれ方が変化することで、心の友だちと子どもたち、さらには現実の世界と子どもたちの関係性も変化してきたことが示されている。続く第4章では、第3章に出てきた心の友だちとは対照的な「小さくてたしかな友だち」の登場する物語として、『ピーターラビットのおはなし』を始めとするビアトリクス・ポターの作品群が取り上げられて

* お茶の水女子大学大学院博士前期課程

いる。灰島氏はこの作品群から推察されるポターの優れた観察眼について指摘した上で、ポターが人生の中でいかにしてその視点を育んだのか、そしてそれがどのように『ピーターラビットのおはなし』に反映されているかについて論じている。

最終章である第5章「絵本サロン」は、現代絵本の研究を存分に楽しみ、それを読者とわかちあいたいという本書のもう一つの目的に対応する章である。その目的を踏まえ灰島氏は、絵本とそれを楽しむ子どもに寄り添った軽やかで温かいまなざしで、『わたしとあそんで』や『まどのそとのそのまたむこう』を中心として、分析を試みている。

灰島氏は第5章において、第1・2章で取り上げた作品も改めて参照しつつ、ジェンダーを分析のキーワードとしている。その上で「赤ずきん」を基にした絵本数点を挙げながら、恐怖に近寄り、飲み込まれ、生還するという受け身のストーリーこそがヒロインのあるべき姿と見なされており、それが女の子の特質をよくとらえていると述べる。そして「赤ずきん」のストーリーが広まった時代よりも女の子が元気になった現代においては「赤ずきん」の物語もより進化し、絵本での主人公の描写も、絵と文で共に受け身の少女から元気な女の子へと変貌を遂げたという。さらにこの章の最後には、「イメージはその時代を映す鏡である」「現代の赤ずきん絵本のなかには、現代の子ども像を反映した強い少女が描かれたものがある」という言葉もある。ただし、この点については異論もあるように思われる。

確かに、絵本の作者たちは現実の子どもたちの姿を観察し、彼らの姿を映した作品を作ってきている。それが巧みであればあるほど子どもたちはより絵本の世界に引き込まれ、様々な体験ができるということは間違いない。しかし、絵本の世界がいつも現実を反映させた、鏡の向こう側のような存在とは限らないのではないかと、とも考えられる（もし絵本が現実世界をただ映し出すだけに過ぎないのであれば、例えばファンタジーのような、現実にはあり得ない事象を扱ったストーリーにいたっては、展開することができないかもしれない）。絵本に限らずあらゆるメディアにおいて言えることではあるが、子どもたちはそこから多くを感じ、受け取り、そして真似をする。『かいじゅうたちのいるところ』を読んで、かいじゅうおどりに耽った子どもがきっと世界中に数えきれないほど存在することは想像に難くない。

結局のところ卵が先か鶏が先かではあるが、絵本が男の子・女の子の特質をとらえているのか、作者がかくあるべきとして考えた絵本の中の男女像が現実世界に投影されたのかは、はっきりとどちらかであると断定することはできないだろう。しかし『絵本を深く読む』と題された本書において、絵本を最も大きく二分した際の基準が「男の子の冒険」と「女の子の冒険（おつかい）」となっていること、そしてそこに切り込むことに灰島氏が意義を見出しているということそのものが、非常に興味深いものと考えられる。

子どもが特定の絵本に感じる「この絵本が好き」という感覚は、非常に主観的であいまいなもののように思える。特に大人が子どもに絵本を読み聞かせる際に、何度も同じ本を読んで読んでと繰り返す子どもは多く、大人からしてみればどうしてその本がそんなに好きなのか分からない、ということも多いだろう。あるいは子どもだけでなく大人にも幾度も読んだお気に入りの絵本がある人もいれば、一度しか読んだことのない本のワンシーンが非常に深く印象に残っているけれども、どうしてその作品が自分の心に印象付けられたのかははっきりしない、という人も少なからずいる。もちろんその理由は人により千差万別だが、本書で灰島氏が指摘する点に改めて着目しながらもう一度絵本を開けば、自分がその作品に対して感じている魅力とは何なのかに近づくことができるかもしれない。

最後になるが、本書は著者灰島氏の遺作である。本書は「（イギリスで現代絵本の騎手となっている作家たちについて）彼女たちの今後の作品を期待しながら、その後を、自由な読み解きのまなざしをもって、追いかけて続けることを、わたしの終わらない旅の楽しみとしたい」との言葉で締めくくられている。この「自由な読み解きのまなざし」を持つことこそ、灰島氏の述べるところの「絵本を深く読む」ということに他ならない。絵本に対するその温かいまなざしが道半ばにして失われてしまったことは残念でならないが、そのまなざしを本書から学びとることが、まだ学問分野としては日の浅い「絵本学」への貢献を使命としてきた灰島氏の遺志を継ぐことに繋がるだろう。